

## 講義5 「新型インフルエンザとその世界的影響」

山本太郎

外務省国際協力局多国間協力課課長補佐・医師

### 【要旨】

本講義では、外務省の機構と任務、所掌事務について概観した後、「新型インフルエンザ」について、その生物学的、歴史的、社会的特性について概要を話し、その上で、なぜ外務省が「新型インフルエンザ」の問題に取り組んでいるか。その際に生じる外交的問題にどのようなものがあるかということ考察する。さらにそうした考察を通して得たものを、今後の感染症対策について、生態学的視点から論じる。その際のキーワードは「共生」という概念。「共生」という概念を通して、二一世紀の感染症対策を考える。

In my presentation, I would like first to introduce the current terms of reference of the Ministry of Foreign Affairs of Japan and next to touch upon avian and new potential pandemic influenzas in their medical, historical and social dimensions. By so doing, I will look into why the Ministry of Foreign Affairs is addressing these health problems, and what diplomatic issues they pose for us.

My presentation will proceed to explore the possibility of controlling infectious diseases from an ecological viewpoint, with focus on “biodiversity” and “symbiosis”, which I think are the key to our endeavours in this area.

ついにそのときがやってきた。

アジアの A 国で鳥インフルエンザに由来すると思われる患者群が報告された。新型インフルエンザによる患者発生を最初に疑ったのは、世界四カ所に置かれている WHO インフルエンザ研究協力センターの一つである。新型インフルエンザ発生の可能性があるという情報は、WHO 地域事務局を經由してジュネーブの WHO 本部に報告された。同時に、各国政府や国連本部、UNICEF（国連児童基金）、UNDP（国連開発計画）といった関連国際機関、さらには赤十字本社、国境なき医師団など世界各地で医療活動に従事している団体にも伝えられた・・・

（先進各国や国連、WHO は互いに協力し、非協力的な A 国政府に情報開示を要求、病原体は新型インフルエンザであることが確認され、各機構は封じ込めに邁進する。いったんは制圧できたかに思えたが・・・）

インフルエンザは燎原の火のように各地に広がっていった。

2 月にアジアの片隅で始まった流行は、ほぼ 2 カ月でアジア全域に広がり、5 月にはオーストラリア、6 月には中東・ヨーロッパ、7 月には南北アメリカ大陸へと広がっていった。8 月に入るとアフリカからも患者発生の報告がもたらされた・・・

それから 2 年の月日が過ぎた。

WHO は非公式に、新型インフルエンザの世界的流行に対する収束宣言を行う準備を始めた。

しかし世界の状況はといえば――。

世界中で 1 億 2200 万人が死亡したと推計された。

その 1 億 2200 万人のうち、1 億 2000 万人が貧しい国に暮らす人々であった。

山本太郎「新型インフルエンザ――世界がふるえる日」より抜粋、一部改変

これは現実の話ではありませんが、実際に起こりうる出来事です。

今回は感染症を新たな視点から見た講演を行いたいと思います。

#### 推薦参考図書

- (1) 「新型インフルエンザ 世界がふるえる日」(岩波新書、2006)
- (2) 「感染症疫学――感染性の計測・数学モデル・流行の構造」(昭和堂、2006)
- (3) 「国際保健学講義」(学会出版センター、1999)